

梧陵さんに学ぶ 危機管理能力

神田香織

講師

かんだかおりさん

福島県立磐城女子高校卒業。東京演劇アンサンブル、渡辺プロダクションドラマ部を経て、一九八〇年神山陽門下生となる。ジャズ講談や一人芝居の要素を取り入れた神田香織独自の講談を次々発表、講談の新境地を切り開いている。日本演芸家連盟加盟、講談協会会員。八六年一講談はだしのゲン」公演で日本雑学大賞受賞。主な演目「チェルノブイリの祈り」安寿と對子土物語」「浜口梧陵伝」。著作「花の嵐も、講談師が語ります。」（七つ森書店）

<http://ofc.or.jp/~kanndu/naichu.html>

まずは、なじみの薄い講談について簡単な講釈を。「講釈師みできたような嘘をつき」という川柳があります。実際には見えていないのに、誇張して表現する。これ講談の特徴のひとつで、お話をより面白く聞いてもらうためのサービスです。もちろん後世に伝えたい実話も語りますし、心温まる人情話も沢山あります。

聞く人の想像力に訴え、感情を豊にする講談の魅力にひかれ、俳優志願から講談師に転職してはや二十余年。戦

争と原爆のなか、たくましく生きる「はだしのゲン」や、消防士夫婦の純愛を描いた「チェルノブイリの祈り」など、私独自の作品に取り組んできました。ちなみに今年もチェルノブイリ原発事故から二〇年、地震による原発事故が起きないことを祈る毎日です。そんな私ですが、ふとしたきっかけで浜口梧陵を知ることになり、四月に新作として発表することが出来たのです。

縁って不思議ですね。「歴史マンガ浜口梧陵伝」を描いた漫画家のクニ・ト

シロウさんと知り合ったのが昨年一月。すぐにマンガを送ってくれました。時あたかもマンシヨンの耐震偽装が話題に上がったころ。危機管理能力に長けた浜口梧陵の生き方、考え方は現代でも防災に大いに役立つのでは？マンガを読み終えた時の直感です。翌月にはクニさんから彼の幼なじみでもある吉村秀實さん（ジャーナリスト）を紹介してもらい、とんとん拍子に講談化の話が進んだのです。

では、その浜口梧陵とは？昭和一一

年から約一〇年国語の教科書に載っていた「稲むらの火」(稲むらとは刈り取った後の稲や、脱穀した後のわらを田んぼに積み重ねたもの)。ラフカディオ・ハーン、小泉八雲が実際にあった話に感動して「LIVING

GOD」(生き神さま)という本を書きました。それを小学生にもわかる教材になおしたのが、「稲むらの火」です。戦前・戦中の防災テキストとして有名なお話で、主人公五兵衛のモデルとなったのが浜口梧陵というわけです。

彼は一八二〇年、房州(千葉県銚子市)で醤油醸造業を営む豪商浜口家の分家の長男として紀州

廣村(和歌山県平川町)に生まれました。そして少年時代に本家の養子になりました。七代目を相続いたします。濱口家(ヤマサ醤油)は江戸にも店があり、栢陵は千葉と和歌山を行き来するかたわ



ら、勝海舟、福沢諭吉とも親しく語り合い、教養と知識を深めていきます。そんな栢陵が常に心配していたのは、故郷・廣村に一〇〇年から一五〇年に一度やってくる、大地震、大津波でし

そして、日頃からの危機管理能力を発揮することになるのが安政元年、廣村が大地震、大津波に襲われた時です。真つ暗な海に流された村人に、村の場所を教えるため稲むらを燃やし人勢の命を救うのです。また、役人に「白費でやるから」と堤防建設の許可を得て、村人たちに日当を払って堤防建設にとりかかるのです。今の「勝ち組」に見習っていただきたいお金の使い方ですね、どうにも立派な人物です。

た。実はこの村は東海地震、東南海地震、南海地震の震源地にほど近いのです。彼は年がら年中「天災は忘れた頃にやってくる」と村人たちに津波の危機を説いて歩きます。

んに仕上げました。ぜひ、ご覧いただき、防災の一助にしてください。ただければ、天国の栢陵さんも喜んでくれるのではと思っております。

(公演のスケジュールはHP参照)